



ラーニング・コモンズから 今出川と京田辺をつなぐ

——一年間のLA活動を通じて考えたこと——

ラーニング・アシスタント 平光佑

(文学研究科 哲学専攻 博士後期課程)

学習支援・教育開発センター 助教 趙智英

1. はじめに

周知のように、本学では文系学生は今出川校地を、理系学生は京田辺校地を主たるキャンパスとしている。これは2013年に文系学部が今出川に集約されたことによるものである。本稿の著者である平はその直前、2012年に法学部生として入学しており、文系学生として京田辺キャンパスに通ったことのある最後の世代に当たる。しかし、それもすでに10年前の遠い昔の記憶であり、2013年以降に入学した文系学生たちであれば、京田辺キャンパスには入学式以来一度も訪れることなく大学卒業ということも全くありえないことではない。

それは、言い換えれば、文系学生と理系学生との交流機会が失われるということである。2020年から日本でも広がったコロナ・ウイルスは、事態に拍車をかけた。サークル活動などを通じてかろうじて保たれていた両校地の学生の交流も、人流抑制が優先される昨今では難しくなっている。それは学習や研究活動にも影響を与えずにはおかないだろう。文理融合的な学習の重要性が言われるようになって久しく、本学においても文理融合科目の設置など様々な制度が整えられているが、コロナ禍はそうした動きを阻んでしまうかもしれない。

このような状況下で、ラーニング・コモンズに期待される役割とはどのようなものか。本学のラーニング・コモンズは、他者からの多様な刺激を受けることが学習の深化につながるという理念に基づいて設計されている。ガラス張りの外壁、視界を遮る仕切りが排除された内部空間は、そのような理念の建築的な表現である。その意図するところを知るには、家にこもって勉強するよりもカフェやファミレスで勉強した方

が捗ったという、誰もが持っている経験を想起すれば良い。私たちは、ただ周りに人がいるというだけでも、何らかの刺激を受け、インスピレーションを得るのに十分なのである。そこで、この理念をもう少し拡大してみよう。今、両校地の間には見ええない壁がある。ラーニング・コモンズは、その壁を穿つ穴となり得るのではないか。今出川キャンパスの良心館ラーニング・コモンズにはグローバルビレッジというエリアが設けられており、気軽に留学生と交流できる場所としても位置付けられているが、それにプラスして、京田辺の情報にアクセスしたり、理系の学生とも気軽に話をすることができるような機能を担わせることができれば、ラーニング・コモンズはさらに魅力的な場所になるだろう。本稿では、そのような取り組みのヒントとなるものとして、2021年度の一年間行われた、今出川キャンパス良心館ラーニング・コモンズのラーニング・アシスタント（以下、LA）による二つの活動を紹介しつつ、文理交流の意義について考えてみたい。

2. 『COMMONS PRESS』の新展開

一つ目の事例として、2021年度の『COMMONS PRESS』の制作過程について紹介したい。『COMMONS PRESS』とは、同志社大学ラーニング・コモンズにて学習支援に携わるLAによって企画・執筆・編集・発行されるフリーペーパーである。これまで、主として良心館ラーニング・コモンズのLA（以下、今出川LA）によって編集・制作されてきた。学習支援に関する記事を、毎号5、6名程度のLAがそれぞれ執筆している。2014年の創刊以来、継続的に発行され、2021年度までに15号を数える歴史のある企画である（図1）。しかし、そのうち京田辺キャンパスラーネード記念図書館ラーニング・コモンズのLA（以下、京田辺LA）が記事執筆を担当したのは、アンケートへの回答などを除けば、これまでほぼ皆無であった。

その点、15号は初めて、京田辺LAから1名、記事を寄せてくれたことによって、特別な号となった（図2）。

その記事は、「通学途中の美味しいパン屋さん～朝の時間の有効活用～」というタイトルで書かれている。執筆者が実際によく利用する近鉄京都線沿線のパン屋を紹介しつつ「朝活」の効用を説くというもので、執筆者の専門とは直接的には関係のない



図1 『COMMONS PRESS』15号の表紙

内容ではあるが、理系大学院生の日常の一端に触れることができるのは、文系学生にとってはそれだけでも新鮮である。文系と理系の心理的な距離を縮めるためには、このようなある種の「ゆるさ」が必要であり、そうした記事を気軽に読むことのできる『COMMONS PRESS』は、その最適の媒体であるように思われる。

同号ではさらに、「学習用YouTubeチャンネル」というタイトルで特集を組み、ここでも京田辺LAが積極的に参加した。この特集は、本学におけるネット配信授業の増加にあやかって、優良な学習・教養系YouTubeチャンネルを紹介するものである。全8チャンネルの紹介のうち、2チャンネルは京田辺LAが担当した。掲載にあたって、同号の編集委員を担当した平と、良心館ラーニング・コモنزでLAとともに学習支援に携わっている趙も実際にそのチャンネルのコンテンツを閲覧したが、驚いたのはその充実度である。理系学生向けの高難易度の動画から、文系学生でも十分に理解できるような動画まで多様であり且つ良質である。こうしたチャンネルは、今出川LAからはまず紹介され得なかったであろう。京田辺LAの協力により、この特集は明らかに深みを増した。

以上のような取り組みを可能にした要因は何であったか。オンラインの活用が大きかったことは疑いえない。これまでも両校地のLAはメールでのやり取りなどの手段によって連絡を取り合っていたが、Microsoft Teams（以下、Teams）を使ったビデオ通話やチャットが両校地間の連絡を従来に比べてはるかに容易にした。ただし、あたかもオンラインが万能であるかのように考えるのは早計である。月に何度か両校地を行き来する教員、アカデミック・インストラクター（以下、スタッフ）の活躍なしには、このような企画は成り立たなかったからである。特に、他校地の雰囲気や反応については、オンラインでのやり取りよりも、直接現場に赴くスタッフに聞いた方が伝わりやすいという感覚があった。こちらから向こうへ伝言を託す場合もあった。チャットの文章では細かいニュアンスを伝えることができないし、画面越しの通話も



図2 京田辺LAが参加した『COMMONS PRESS』15号の記事



やはりどこか親密さに欠けるからである。オンラインは、「リアル」な交流の完全な代替とは決してなり得ない。人を介した伝言という一見時代遅れな方法に、オンラインの直接性は敵わないのである。

『COMMONS PRESS』誌上での文理交流はこのようにして可能になったのだが、実のところ、文理交流は最初から今号のテーマとして掲げていたわけではない。はじめは、せっかくなので京田辺LAにも声をかけてみようという、単なる思いつきである。しかし、結果としてそれは『COMMONS PRESS』の、ひいてはラーニング・コモンズの可能性について再考する機会となった。両校地の学生が意見や情報を交換する場は、ここ以外には案外少ないことに気づかされたのである。

『COMMONS PRESS』は、今出川キャンパスだけでなく京田辺キャンパスでも配布されている。それゆえ、京田辺LAが本誌に関与するのは自然なことであり、それまで寄稿がなかったのがむしろ不思議なくらいである。今後はさらに、記事の投稿だけでなく、例えば編集にも京田辺LAに参加してもらうなどして緊密な協力体制を築き、両校地の垣根を低くする取り組みへとつなげていくことができるだろう。2021年度に改定された『COMMONS PRESS』の投稿要領に京田辺LAの参加が盛り込まれたことは、一步前進である。また、『COMMONS PRESS』をより良いものにしていくためには、読者の反応を知ることも重要であろう。残念ながら今のところそのような仕組みは作られていない。例えば紙面上にQRコードを乗せてアンケート調査を行うなど、方法はいろいろ考えられる。今後の課題である。

3. ラーニング・アシスタントを対象とした研修における講義

Teamsは、2021年度秋学期に行われたLA対象のフォローアップ研修でも大いに活用された。この研修は、対面とオンラインとを組み合わせて行われた。平はTeamsを使ってオンラインで参加したのだが、主にラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズに常駐しているスタッフからの要請を受けて、京田辺LAに向けて講義を行うことになった。哲学を専攻する立場から理系院生に向けて話すということで、テーマは科学哲学の分野から選んだ。ここで内容を詳述することはしないが、コロナ禍において自然災害と人災との区別は可能かという論点を巡って、18世紀フランスの思想家ジャン＝ジャック・ルソーの弁神論を足掛かりにして話した。約20分の講義の後、10分ほど質疑応答を行った。理系的な視点からの質問や指摘は文系の筆者にとっては新鮮であり、文系同士の対話ではありえなかったであろうという点で、意義深いものであっ

た。時間の制限だけが惜しまれた。実際、Teamsでの通話を終えた後も、京田辺校地のLAたちの間ではしばらく議論が盛り上がったと聞く。

京田辺LAに向けて講義を行った今出川LAにとっては、文系・理系の垣根を超えて視野を広く持つことの大切さを痛感させられる経験であったわけだが、今改めて、この経験から学び、考えたことを述べるなら、次のようになる。文系の自分の研究を理系学生に説明しようとした時、普段とは違う仕方では説明しなければならない。すなわち、同じ研究科のなかで研究発表するのとは違い、コンテキストを共有しない人々とのコミュニケーションにおいては、どの言葉であれば伝わるかということを探りながら話すことが必要になる。あるいは、コンテキストを作るという作業そのものが重要になる、と言っても良いかもしれない。それは、ある意味では非効率なコミュニケーションである。たまたまこの言葉を使ったら伝わった、だからそこを足掛かりにして話を広げてみよう、というようなことの繰り返しであり、もどかしいことこの上ない。しかし、他者とコミュニケーションするということは、そのような偶然性に賭けるということでもある。したがって、ラーニング・コモンズを文理交流の場にするとは、より広義には、そうした偶然が起きる環境を整備するということを意味する。偶然を整備するというのは矛盾した表現になるが、要するに多様性を保つということ、普段出会わない人が出会う場所にするということである。オンラインの活用はその一手だが、その際に重要なことは、オンラインを単に作業効率化のためのツールとしないことである。欲しい情報を簡単に収集するとか、遠隔にあっても相談したい人にすぐ相談できるとか、そういうことが重要なのではない。むしろ、予期していなかった視点から意外性のある指摘をしてくれるような専門外の相談員がいることが、学習支援においては重要なのではないだろうか。ASAでは基本的に2～3名のLAが常駐で相談対応に当たっているが、専門外の相談に応じることも当然ある。もちろん、専門的なアドバイスが求められる場合もあるが、門外漢には門外漢の積極的な役割があるということは強調されて良い。そのような意味で、今出川キャンパスで学ぶ文系学生からの相談に京田辺キャンパスのLAやスタッフが応じることも、学習支援として大いに効果的であろうということが言えるのである。

4. まとめ

以上、二つの事例紹介を通して、文理の交流の意義を考えてきた。管見に過ぎないが、ラーニング・コモンズを文理の交流の場として位置づけようとする取り組みは、これ



まであまりなかったように思う。今後のヒントになれば幸いである。

コロナ禍以来、大学はいかに閉じるかを考えてきた。しかし、これからは徐々に、いかに開いていくかを考えていかなければならない。それはおそらく、閉じることよりも難しい判断である。安全性が最優先される現在の社会においては、開くことと感染リスクとが結び付けられてしまうからである。困難な対応を迫られるなかで、ラーニング・コモンズ独自の役割は何であるのかが今改めて問われている。それは、単なる自習室でもない、完全にオープンなラウンジでもない、ある種のサードプレイスとして、新たな利用価値を見出すチャンスでもある。文理の交流という取り組みは、その一つに過ぎない。